

## 歌の周辺

晩秋の田園風景を詠んだ歌である。稲の刈り入れが済んで、人々の姿が消え、田んぼに静寂が訪れる。あたりに人の声途絶えたことを「ことは、野にほろびてしづかなる秋」と表現した。

脱穀のあと残った藁は円錐形に積み上げられ、田んぼに並ぶ。それを藁塚と言うが、秋の陽射しを浴びて藁塚の藁は乾燥し、美しい色つやを帯びる。故郷の愛媛で見た光景や、関東で見た光景を重ね合わせ、どここの場所とも分らない秋の田の、藁の美しさをえがいてみたかった。

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・8

ことば、野にほろびてしづかなる秋を  
藁うつくしく陽に乾きたり

——『汽水の光』

【鑑賞】「ほろびて」の強い表現が歌を判りにくくしているがこは素直に収穫ののちの田んぼの景のみを感じ取りたい。稲が藁になるまでは多くの人の働く姿と声に満ちていただろう。人々が去り、声が消滅した秋の田に陽を浴びて乾いてゆく藁。その秋の美しい景の奥に見せ消ちの手法で、収穫時の賑やかな人々の姿が浮かんで来る。

(大野英子)



住吉灯台

#### ふるさとコレクション——179

##### 奥の細道むすびの地・大垣船町川湊（岐阜県大垣市）

俳聖松尾芭蕉が舟で下った船町湊の水門川は、大垣城の外堀で濃尾三川の揖斐川へ合流している。元禄期の大垣は、水運と陸運が交わる東西交通の要衝として経済が発展し、新しい文化が花開き、芭蕉が伊賀から江戸に出た若い頃から、芭蕉に心を寄せる俳人たちが集う地であったようだ。

さて芭蕉は、元禄2年3月27日「みちのく」へ旅立つ。「奥の細道」の旅である。そしてこの旅のむすびの地として大垣を訪れている。3回目の来垣であるが、大垣の俳人達にとって格別の意義深いものであったろう。芭蕉は大垣滞在の後、9月6日伊勢の遷宮を拜もうと船町湊から舟に乗り、俳人達の見送りを受けて水門川から伊勢へ出立した。今は、船町湊周辺整備をされて、蛤塚、別れを惜しむ芭蕉と木因の像、住吉灯台、奥の細道ゆかりの句碑などが並ぶ。

4回にわたる芭蕉の来垣は、俳友谷木因を中心とする美濃俳壇に新風を吹き込んだ。

平成4年宮英子夫人をはじめ滝の会の方々がこの「結びの地」を訪ねられた折、岐阜支部会員も参加した。懐かしい思い出である。

（写真・解説 水野 春子）